

平成30年度 第2回奈良市の地域教育を考える懇話会 意見の概要

開催日時	平成 31年 2月27日(水) 9時30分から10時45分まで
開催場所	奈良市役所 北棟6階 第22会議室
意見等を求める内容等	1 平成30年度 奈良市コーディネーター研修の報告について 2 平成30年度 総合コーディネーター連絡会の報告について 3 平成31年度 地域教育推進事業について
参加者	出席者 11人 ・ 事務局 10人
開催形態	公開 (傍聴人 0人)
担当課	学校教育部 地域教育課

意見の内容の取り纏め

上記、1～3について報告、概要説明のあと、出席者に助言、意見を求めた。

■意見の概要

- 1 平成30年度 奈良市コーディネーター研修の報告について
- 2 平成30年度 総合コーディネーター連絡会の報告について

▶コーディネーター研修について

- ・第4回に予定されている「危機管理について」の研修は、災害がいつ訪れるかわからないので良いと思う。講師は消防局あるいは日赤となっているが、日赤は危機管理を兼ねてはならず、応急処置やボランティア活動などがメイン。消防局も、実際災害が起こったときに対応するところ。危機管理として研修されるのであれば、他の機関、もしくは危機管理課の参事(元自衛隊の将官で東日本大震災を仕切った方)をぜひ推薦したい。
- ・今年度から研修を生涯学習財団も一緒に受けている。コミスクの方針など一緒に学ばせていただくということで貴重な機会となった。研修の場に行くと地域の皆さんが「公民館の人も来てくれてるんやね」と声をかけてくださって、「地域の皆さんも先生も公民館職員も皆一緒に活動していくんだ、学んでいくんだ」という気持ちの部分からも良い機会になっている。引き続き、この流れが続いていけば良いと思う。
- ・生涯学習財団の方はいろいろと勉強されているので、参加するだけでなく、何か貢献する形の連携があっても良いのではないか。
- ・ポスターセッションの際、中学生たちが一生懸命発表している姿などは、公民館にはなかなか見ることのできない良い機会だった。
- ・公民館が関わっていただくことは地域連携そのものに繋がっていく。危機管理の研修も、地域と学校がひとつになっていくという意味で、とてもよいつながりができていると思う。期待をしている。
- ・今年度、教員の初任者研修に関わらせていただいたが、若い先生が地域との連携という意識をもって来ていた。子どもを育てるうえで、どうやって地域と連携していくのかという意識が非常に高い。大学の教育も変化していていると感じた。
- ・天理大学の授業でも、地域連携の話を地域コーディネーターにさせていただいた。学生たちは、「学校の先生は地域と連携しなければならない」ということを学んでおり、その意識はある。

・奈良市は主体的かつ自律的、戦略的に研修を行っている。中教審でも、教員の養成採用研修がいかにか系統的につながるかということが話題になっているが、奈良市では既にうまく実践しておられるので、全国に先駆けたよい事例だと感じる。

・研修年6回と充実していて、他の市町村にはない。手厚く研修していただいているので、ぜひ磨き上げてほしい。

▶「交流の集い」について

・来年度の「交流の集い」で、若い教員が参加とあるが、どういう形でどの程度を想定しておられるのか。教員へ参加の呼びかけはどのようにされるのかが気になるところ。

・昨年の交流の集いは教員81名、多くは管理職の先生。コーディネーターの方たちは、できれば若い先生たちに参加してもらいたいとのこと。来年度は、夏休み中の平日が参加しやすいのではということで、8月平日を予定している（事務局）

・とても趣旨は良いと思う。ぜひ若手の先生に参加していただけるように頑張ってください。

・せっかくの連携なので、教員養成課程の学生も参画をしていただくことも必須ではないかと思う。

・学生が参加できたらいい。これから教員になりたいという学生が話をできる機会があればユニークだと思うが、特別に学生向けに構成するというのは大変であろうか。

事務局→まだやわらかい状況なので、ご意見は反映していきたい。

・特に養成と研修を融合させることはキーワードとして大学も使っている。学生は、研修の様子を見ながら、将来、自分がどういうことをやるかというイメージが湧いて、4年間何を学ぶかということがフィードバックされる。大学を問わず、ボランティアをやっている学生たちが束ねられて、学生のグループが、きちんと目的をとらえて参加するというようなワンセットが組めるなら、ご協力させていただきたい。

・学生が地域と学校の連携学校協働活動にボランティアで参加できて、その経験が交流の集いでも発表できるというような一連のプログラムなどを作っていたら、大学としてはありがたい。

・教員になる、ならないに関わらず、地域に関わっていくということは、学生のキャリアUPにもつながるので良いことだと思う。

・当日だけ聞きにくる学生もある程度受け入れてくれたらありがたい。そのあたりを総合コーディネーター会議でもご検討いただきたい。教員養成の部分まで広がって非常に良いと思う。

・会場について、今年はどこかの学校で開催しようかという案が出ている。キャパシティ的にいけるようなら誘い方も含めてご協力いただけたらと思う。

▶キャリア教育について

・キャリア教育の研修が第6回目にあるが、タイトルにある「支援の在り方とは」であれば、本来はもっと前に実施しておかないと活動支援につながってこない。2022年度以降、奈良市として「どのようなキャリア教育を展開していくのか」という各学校の発表、また具体案であれば意味があると思う。

・キャリア教育の研修が第6回に振りかえりの位置づけであるとすれば、平成31年度からのキャリア教育の在り方がどうあるべきかという方針が地域に伝わっているのか。それがポスターセッションとして発表されるのか。

事務局→奈良市の中学生が集まって、職場体験学習の一連として行うところに、コーディネーターも参加して研修してもらおう形で実施した。来年度以降も続けて、コーディネーターが職場体験にどのように関わ

っていかか、今日お話を伺ったことを踏まえて進めていきたい。

- ・ポスターセッションに参加したが、中学生はどんな質問にも自分の言葉で答えていた。とても良い発表だった。キャリア教育＝職場体験学習ではないと思っている。学校では以前まで、校外学習など学習したことをまとめて壁新聞を作るだけだった。今では、いろいろな行事を行ったあとにポスターセッションという形で発表している。子どもたちの将来を見据えた時に必要な良いことだと思い進めている。
- ・キャリア教育を中1、中2、中3と、どのように捉え、考えていくのか。3年間の取り組みの在り方を含めたポスターセッションを考えていけたら、学校としてはありがたい。また、中1の生徒が、地域の方と何かを作っていくことは発展性があるような気がする。
- ・キャリア教育の成果を中学生が発表するのは難しい。生徒だけでなく、キャリア教育の在り方が振り返られるような研修になればと思う。
- ・小学生中学生のボランティアはイベントの受付からしっかりできている。そういう機会があってプレゼン力がつき、プラスになっていく。人のやっていることを見て、やらなかった子どもたちも刺激を受け、吸収していくこともある。
- ・ポスターセッションは、会場が狭いなどの課題がでてきている。どこかご協力いただけるのであれば情報共有したい。

3 平成31年度 地域教育推進事業について

▶コミュニティ・スクールとの関わりについて（※以下、コミスク）

- ・奈良市は平成32年度にコミスクを全市展開することを目指している。十分に地域と学校の連携が機能しているところに、さらにコミスクを制度化していくことを、どうメリットにしてくのか。既にコミスクがある学校の経験を踏まえてなど、今後の進め方についてのご意見をいただけたら。
- ・地域教育協議会が発足して11年、それぞれの学校のやり方、特徴がある。今まで築いてきた地域教育協議会が下請け的にならないようにしなければならない。「コミスクはこう考えたから地域教育協議会は実働部隊としてこれやってね」では、動かなくなってくるのでは。文科省や市の教育方針に沿いながら、地域の特徴とどう合わせていくか、地域教育協議会の10年間の実績をもってどう組み込んでいくかによってコミスクがうまく回るか回らないかが決まってくる。そのようなところをポイントにおいて、コミスクの準備委員会を進めている。
- ・文科省は車の両輪に例えているが、奈良市の場合、地域教育協議会のメンバーがコミスクの委員になる場合が多いのでは。上下関係は注意すべき。
- ・文科省は、話し合いの場としてコミスク、実働の場として地域学校協働本部としているが、奈良市はすでに両方の機能を兼ね備えた地域教育協議会がある。文科省よりも先行して独自のかたちを作られている。
- ・コミスクの委員構成が非常に重要である。地域の重鎮を集めた形骸化した組織であれば、実働との間に齟齬が生じる。コーディネーターが確実にコミスクに入っていくことで、うまく連携していくことができるのではと思う。
- ・これまでの11年、学校の事情をよく知っているコーディネーターがコミスクに入っていくのは学校にとって動きやすい。また、コーディネーターも違う角度から見つめていただくよい機会になるのではないかと思う。
- ・地域の重鎮ばかりがコミスクの委員で、コーディネーターが絡んでないと懸念を抱く。
- ・学校の方でも、コミスクと地域教育協議会の関係をどのようにしたらいいのか悩んだ。コミスクの委員長と

- 地域教育協議会の会長は同じ人がなったらどうだろうか」と提案した。結果、委員長と会長は同じ方になってくださり、メンバーも東部山間ということもあり一緒。ともに同じ方向を向いて進んでいける。
- ・コミスク、地域教育協議会、と一般的にはわかりにくい。地域では地域自治協議会も進んでいて、これもまた同じ人がやっている。
 - ・コミスクは法に規定された組織。地域教育協議会はボランティアの集まりで任意の組織。奈良市は任意の活動が充実してきた。コミスクは法できちんと決まっていることから、地域教育協議会の活動では知り得なかったことを知ることはある。一人の人間が立場を分けて動いていくというのは奈良モデルでいくつか経験していかないとわからない。
 - ・メンバーが重なることでご負担がさらに増え、協議会の活動がダウンしてしまうのでは？という懸念を抱く。
 - ・飛鳥校区は、小学校のコミスクの人たちが中学校のコミスクも兼ねている。忙しくなる反面、話し合いが1回で終わる、共通理解が進みやすいというところもある。
 - ・地域教育協議会は文科省でいう地域学校協働本部にあたる。地域教育協議会と教育委員会は太いパイプができていて、文科省より先行しているので「いいとこどり」した方が良い。コミスクのメンバーには、例えば“地域教育協議会のコーディネーターが学校長の承諾を得て入る”などの仕組みを作っておくこと。
 - ・奈良市は文科省の先取り、コミスクの未来型で、将来的に融合していくこともあり得る、ということを実感した方がよい。両方あるのは強みであるから活かして行く。ただ、一般市民からするとわかりにくいので、広報は工夫してしっかりやっていくこと。自分たちが何をどうやっているのか自覚にもなる。
 - ・文科省のポンチ絵や言葉は非常にわかりにくく、全国から同じような声がでている。コミスクは会社でいう役員、地域教育協議会は経営部長など各部の責任者、というイメージ。地域学校協働本部は、学校の校長先生の方針や、学校としてどういう戦略をもつのか、知るすべもなかった。外から学校が必要そうなことを考えて、任意の人たちが協力をしていた。
 - ・奈良市は地域教育協議会のほうが中枢機能なのでは。奈良市はこうなった、ということをごきちんとして説明する必要がある。
 - ・次の課題は、コミスクのメンバーをどのように構成するのかということ。地域活動に経験ある方が半分、有識者が一人、企業の方、云々などの、ガイドラインを作っていくことが大事。
 - ・地域教育協議会は、奈良市教育委員会と太いパイプがあって進んできたということと、地域教育協議会も学校運営協議会も含めてひとつのコミスクと考えていることは、奈良モデルとして大切にすべき。
 - ・奈良モデルを強調するとき、意思決定隊と実働部隊など、頭と手で表すとヒエラルキーが生まれる。地域教育協議会も考えてくださっているの、ヒエラルキーを生み出さないような上手な説明や方法をしていただければ。
 - ・車のタイヤ、同心円で例えている。学校の責任者がタイヤの軸。コミスクが円の中心、協力していくのが地域教育協議会、さらに手伝ってくれているのが地域のボランティア。地に足をつけていくのは、地域にいる人がすべてだという考え方。
 - ・コミスクの選任については校長先生が判断されると思うので、ここでの話をしっかりと伝えていただき、これまでの財産を最大限活かした形にしていただきたい。